慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ルイス・I・ブレドヴォルド著『啓蒙主義のすばらしい新世界』
Sub Title	Louis I. Bredvold : The brave new world of the enlightenment
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1964
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.37, No.5 (1964. 5) ,p.96- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19640515-0096

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

であろう。

地域研究とは、従来の縦割りの学問体系を横に裁とうとするものである。したがつて、そこには抵抗も多いし無理を生ずることもあろう。しかし、地域社会では、特に同時限的には横の連繋がきわめて強い。本書は一私企業の調査報告であるが、前述したような地域的小国ではその企業体が政治的にも強い連関性をもつものであることを痛切に感じさせる。逆の立場から云えば、地域研究にはまずこのような調査資料が必要にして不可欠だ、ということである。その意味で、本書は調査資料としては無論のこと、地域研究にとつて役立つ数多くの示唆を与えるものとして、高く評価されるであろう。

（賀川俊彦）

Louis I. Bredvold: The Brave New World of the Enlightenment

Ann Arbor, The University of Michigan Press, 1961, 164 pp.

ルイス・I・ブレドヴォルド著

『啓蒙主義のすばらしい新世界』

novus ordo saeclorum を思想によつて造型化しようとする不断の努力は、十七・八世紀の啓蒙主義者たちに共通したものである。啓蒙主義の時代は、まさにヨーロッパが中世的世界から離脱し、いわゆる近代精神を確立しつつあつたときである。この時代の思想家は、徹底的に人間＝自然を探究し、それに基づいて社会・道徳・制度を構築しようと試みていたのである。「ラディカルということは、ものごとを根本からつかむということである。だが人間にとつての根本は、人間そのものである」（『ヘーゲル法哲学批判』）とは、マルクスの有名な言葉であるが、むろんその把握の仕方に相違のあることは当然のこととしても、われわれは、旧い確信から人間そのものを解放しようとする点に、啓蒙主義にラディカルなものを感ぜざるを得ない。当時の時代精神は、ブレドヴォルドが表現しているように、まさに The Brave New World（シェクスピアの言葉）であつた。

言うまでもなく、この言葉にはなかば風刺の意味がこめられている。現代の時点からみると、啓蒙主義思想は、野放図なデーモンにとり憑かれたかのごとく、ヨーロッパを気狂いじみた冒険に曝してゆき、このところに、思想の政治的現実化のもたらす悲劇性をわれわれはまざまざとみせつけられる思いがする。啓蒙主義の異常なエネルギー、その否定的情熱のほとばしりは、たしかに美しい花ではあつたが、それゆえに狂い咲いた花々でもあつたのである。われわれは、当時の群がつた諸思想をただちに眺めていることはできない。それらは、われわれ自身の思想状況を規定しており、われわれ自身の問題として把えなおさなければならないばかりか、その意味では、ふたたび立ち戻らなくてはならない現代の出発点なのであ

る。「自然法理論の拒否」、「科学の新しい約束」、「人間的自然についての感傷的見解」、「自然にしたがうということ」、「ユートピアの展望」、「バークと社会哲学の再建」の各項目のなかで、ブレドヴォルドは新しい世代の思想を簡潔に叙述し、The Brave New World にわれわれを誘つてくれる。

啓蒙主義として開花したものは、けつして統一した思想形象ではない。むしろ逆に、そこには、多彩な、そしてたがいに乖離し、反撥さえし合つていた諸思想がわれわれの眼をうばう。だがあえてそれらのなかに統一化されたテーマというものを求めると、人間的自然とは何か、という論争であろう。著者の指摘をまつまでもなく、これこそが近代を中世的伝統の自然観と対立させるメルクマールであつたのである。十七・八世紀に属する思想家がこぞつて拒否したものは、かれらがすでに廃れたものとみなした自然法であつた。かれらの思想形成の過程は、この自然法に代つて、どのような概念を構成してゆくかという側面にもつとも顕著である。ところで、自然法ほど曖昧な概念はない。キケロ以来の伝統的自然法は、人間理性がしたがうべき普遍法則であつた。それゆえ、自然法とは、あたかも自然法則としての性格をもつものとされ、同時に現実の如何にかかわらず、人間と社会を支配する当為であつた。じつは、人間的自然性はそのような虚構によつてのみしか、法・正義の妥当性を受容できないのであつて、自然法はそもそも、物理学の自然法則と異つて、たとえそれが侵犯されるようなことがあつても、そのために妥当性を失うどころか、反対に、人間の侵犯自体が自然法の妥当性を証明するというような道徳的当為なのである。このような自然法が、中世ではキリスト教神学に接受され、宗教的色彩に塗りつぶされ、人間の魂と生活を導く強制的命令となつたのである。

ルネッサンス以来、ヨーロッパに出現した科学的精神は、啓蒙主義者に引きつがれた。かれらにとつて、自然法はまつたくメタフィジカルなものとして映り、科学的実証主義の批判に堪え得るものではなかつた。かれらも《自然法》というタームを使用しているが、その意味はより自然法則に近く、したがつて、物理法則と等価なものでなければならなかつた。啓蒙主義者はなによりもまず、人間的自然に則した法則的一般化を求めていつた。人間的自然を利己的悪性とするホッブス、法を慣習に還元するモンテスキュ、あるいは人間を tabula rasa とみなすロックなど、人間探究はさまざまなニュアンスの差をみせながらも、かれらの伝統的自然法に対する破壊的批判は激しく、かれらが人間的自然を支配する法則にナイーヴな信仰を抱いていたことは明らかである。

「科学の新しい約束」は、ガリレオにはじまりニュートンによつて完成をみた物理学的世界観の確立に負うことは言うまでもない。それが政治思想にあたえに革命的転回は大きい。たとえば、人間的自然に関する機械論的説明は、ハッチソンのあざやかな代数式的シンボルを生みだした。道徳・社会の科学は、とりわけフランス・フィロゾーフのあいだで熱狂的に支持を受け、ラ・メトリ、ドルバック、エルヴェシウスらの作品にあらわれ、思想的革命を劃したものであつた。科学への確信に充ちたかれらが、反伝統的態度を軽蔑的

に示し、誤謬と偏見からの人間解放と自然法の適用をパラレルに考えることができたのも当然である。しかしながら、このような人間機械というみじめさと対照的に、啓蒙主義の時代は同時に、人間的自然というものの科学的法則化とは逆方向に、それをロマン的にイメージ化したことも見落せない。ルソーの名をあげるまでもなく、われわれは甘美な涕欷に耳を澄まされる。人間的自然の官能性を情緒的に描くことは、その科学的研究とともに、この時代の二つのいずれも反伝統的傾向として注目される。ブレドヴォルドによれば、一七四〇年頃に、*sentimental* という新造語が生じたといわれる。

その後、ロマン主義がヨーロッパ全体に拡大することとなる。このように、自然と文明、あるいはまた自然と作為とのアンティノミーによつて魂を引き裂かれた人びとは、時代に逆游する敗残者であつたろうか。感傷主義者のあえなさは、すでにみたように、唯物論者・科学主義者の倨傲さと、奇妙にも「自然にしたがう」という命題において軌を一つにしていたわけである。かれらの現実変革への志向は、従来のあらゆる規範、とくに宗教を厳しく批判し、あるごとくある人間的自然の過去からの断絶を宣言したといえる。ところで、文明にひどく失望した感傷家が、あるいは人間の善性を、あるいは人間の悪性（エルヴェシュスは、ホッブス的な人間的自然を設定し、人間の救済をもつぱら立法行為と教育にゆだねた啓蒙的専制を主導し、そのことにより名声を得たとともに、悪評をもかつたのだが）を信じ、あらゆる制度と秩序に道徳的堕落の原因を求めたことは、ある程度の真実性は否定できないとしても、その議論が極端に主張された場合――啓蒙主義者はしばしばそうであつた――は、かえつて自己矛盾を招く。教育を一切否定する教育論、婚姻を蔑視とする欲望の放埒、知識そのものを拒絶する原始的生活、これらの文明の裸体化とでもいうべき思想の夢は、思想の渉猟者だけに許された情景である。

人間理性への信仰は、正しい理性がつねに正しい未来を導くというロジックを生む。啓蒙主義者がユートピア社会を単純に描きえた理由である。だが注目すべきことは、十八世紀におけるユートピア的希望は、《進歩の理念》と深くきり結んでいたことであろう。それは、歴史を堕落へと向うペシミズム、もしくは原初的自然へ回帰する循環として把える歴史観とは異つて、新しい意識である。みずからはフランス革命の犠牲となり、獄中に日々をかこちながら『人間進歩の歴史』を書いたコンドルセは、科学と理性への信仰によつて煌く未来を予言した、フィロゾーフの典型的な例である。またゴッドウィンのごときユートピアンは、究極的には、アナーキズムという涯なき夢を抱いていた。しかし、フランス革命が現実にもたらした恐怖の政治は、幻滅以外のなにものでもなく、詩人シェリイをしてさえ、苦き予言の瓶を一滴たりとも飲むなかれ、過去をして葬らしめよ、と詠じさせたほどである。

このように、啓蒙主義思想を批判的に取りあげ、ブレドヴォルドは最後に、そのもつとも激情的な批判者であつたE・バークの思想を考察する。ここでは、『フランス革命に関する考察』からつぎのパラグラフを引いておくだけで充分であろう。「権力を温順なもの

にし、生活のさまざまな陰翳を調和し、そして柔かな同化作用によつて、私的な社会生活を美しく和やかにする感情を政治のうちにくみ入れてきた、心地よいすべての幻想が、光と理性という新しい征服的帝国により霧散させられることになる。生活の典雅な襞がことごとく、無慙にも引きちぎられてしまうのだ。すべてのこれまで附加されてきた理念――われわれのむき出しな、おののく人間的自然の諸欠陥を蔽い隠し、それをわれわれ自身の評価において尊厳にまで高めるのに必要であると、ひとの心が認め、思慮が許した、かの道徳的想像力というものの衣粧からあてがわれてきた理念――が滑稽で、不条理な、廃れた振舞いとしてくつがえされてしまうのだ。」

バークがフランス革命を野蛮な哲学、理論的ドグマとして非難したことはあまりに有名である。その傍ら、アメリカ植民地革命、アイルランド問題、インド統治をめぐつて、かれはイギリス政府の専断的態度を批判した。バークが啓蒙主義に対する保守主義者であつたことは、やはり人間的自然に対するかれの認識の仕方に依拠している。かれにとつて健全な理性の在り方とは、人間性が善性と悪性の混合であること、したがつて社会問題の複合性をリアールに認識することであつて、それゆえに、政治の慎慮（プルーデンス）こそ重要であり、かつ有効であるとされた。この慎慮の基準とは一体なにか。この点、バークの経験的理性は、いささか論理的に矛盾しているかにみえるが、伝統的自然法への信仰に復帰している。とすれば、啓蒙主義の思想的サークルは、自然法の拒否から始まり、バークによるその復活で閉じられることとなる。著者は、本書に附した短いエピローグのなかで、人間がその自然的存在を自然法――道徳的要請、あるいはまた科学的法則の定式化というかたちをとろうと――のなかに見出そうとする執念を指摘し、人間であるがゆえにまた今後も続けられるであろう努力を賞揚している。「人間は宇宙のなかで独自の存在であり、そして人間の精神は見えざる世界においてのみ生き得る」というブレドヴォルドの言葉は、けつして佗しい真理ではない。

（奈良和重）

Clifford Geertz (ed.): Old Societies and New States

The Quest for Modernity in Asia and Africa

The Free Press of Glencoe, New York, 1963, viii+310 pp.

C・ギァツ編『古い社会と新しい国家』

現代政治学をより理解的な水準にまでたかめ、現代政治を一般的、包括的に認識しようとして発足した比較分析は、西欧世界についての既得の資産内容を再整理するかたわら、新しい知的関心を新興諸国に払うことで、学問領域の拡大と、方法論上の推敲を重ねてきた。それは、政党、政治集団、行政部、議会などの手なれた概念にまつ